

「ぐんまダイバーシティ推進地域ネットワーク」の設立と 記念セミナー開催

高等教育機関等の連携の下、11月11日に群馬県内初の「ぐんまダイバーシティ推進地域ネットワーク」が設立され、初代会長に、群馬大学の工藤貴子副学長が任命されました。主として男女共同参画の取り組みを通して、群馬県内のダイバーシティを推進し地域の活性化を図るため、参加の13機関が連携して情報共有を行い、群馬県の未来を担う女性の育成や教育研究の交流等を積極的に推進していくことになりました。

初の連携事業として、同日群馬大学において「ネットワーク設立記念セミナー～ぐんまダイバーシティ推進地域ネットワークによる群馬の活性化～」を開催しました。参加者は36名でした(女性22名・男性14名/学外13名・学内23名)。基調講演では「男女共同参画をぐんまから～群馬県のポテンシャルとダイバーシティネットへの期待」と題して、群馬県男女共同参画推進委員会会長・共愛学園前橋国際大学学長の大森昭生先生にご講演いただきました。オピニオンリーダーとしての県民運動の創出、産業界との協働、男女共同参画に関する学びの共有、機関のダイバーシティ環境創出等の観点から、詳細なデータに基づき、ネットワークの可能性について語られました。また、セミナー後半では、各機関の実例報告として、群馬県立女子大学から国際コミュニケーション学部小林良江教授、群馬工業高等専門学校から木村清和教授、群馬大学男女共同参画推進室工藤貴子室長より、女性の活躍にむけた具体的な取組の紹介がありました。なお、セミナーについては、今後報告書を作成し、ネットワーク参加機関で共有していく計画です。

参加機関

関東学園大学、共愛学園前橋国際大学、群馬県立県民健康科学大学、群馬県立女子大学、群馬工業高等専門学校、群馬大学、群馬パース大学、上武大学、高崎経済大学、高崎健康福祉大学、高崎商科大学、東京福祉大学、前橋工科大学（50音順）



2017. 3

vol.13

発行

国立大学法人群馬大学
男女共同参画推進室

〒371-8510
群馬県前橋市荒牧町4-2
TEL: 027-220-7146
FAX: 027-220-7143
mail:kyodo-sankaku@jimu.gunma-u.ac.jp
HP:http://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/

まゆだま国際交流ランチミーティング 開催



2月1日、荒牧キャンパスレストランあらまきにて初めての国際交流ランチミーティングが開催されました。平成27年に教育学部と協定を締結したリトアニア教育大学から来学された、国際交流センター長のロレッタ・ホツキエニア教授をお招きしてのランチミーティングです。ホツキエニア教授には、「リトアニア共和国の男女共同参画」というテーマでお話いただきました。

リトアニア共和国の女性研究者比率はEU加盟国の中でもトップクラスで、研究者の半分を女性が占めています。男女共同参画の動きは、ソ連からの独立後の1990年代以降に急速に進みましたが、これはソ連撤退後、ロシア人に替わって多くのリトアニア人男性が政治・行政の職務につくこととなり、それ以外の分野での女性の社会進出が求められたという経緯にもよるそうです。現在では教育、医療、メディア分野の職業に占める女性の割合は8割であり、リトアニア教育大学でも教員のうち87%が女性という驚異的な割合であるとのことでした。

今回は教育学部国際交流委員会との共催という新たな試みでしたが、他国の男女共同参画の状況を知ると同時に、日本の状況を問い直す大変良い機会となりました。

LGBT講座 開催



男女共同参画の重要な課題の一つであるセクシュアル・マイノリティの方々への理解を深める目的で、1月10日、荒牧キャンパスで「LGBT講座」が開催されました。講師は、大学生の当事者が中心となって活動している特定非営利活動法人Re:Bit（リビット）の教育事業部マネージャー三戸花菜子さんとメンバーのタスクさんでした。126名（学生114名・教職員8名・行政担当者等学外者4名）の参加がありました。

セクシュアル・マイノリティであるLGBTの方々には「13人に1人」、身近なところにいる。性別は男性・女性と二分できるものではなく、また、異性を好きになるか同性を好きになるか等の性の嗜好性も、グラデーションのように多様であり、それぞれの性のあり方を社会の中で尊重していくことが重要であると、お二人の思春期の体験談も交えて話されました。アンケートによると学生の満足度は98%と高く、教職員にとっても、深い示唆のあるすばらしい講座になりました。

第4回まゆだま会 全学ランチミーティング 開催

第4回まゆだま会全学ランチミーティングが、12月20日に荒牧キャンパス中会議室にて開催されました。また当日は研究活動支援制度利用者によるポスターセッションも行われ、研究活動の成果が発信されました。今回のランチミーティングには、女性研究者・職員のみならず、対象者を男性教職員にも拡大し、より良い情報が交換できることを目的としました。年末のあわただしい時期にも関わらず、41名の方にご参加いただきました。

平塚学長からの開会挨拶後、和泉理事、齋藤教育学部長、富山社会情報学部長、本多理事よりそれぞれご挨拶をいただきました。その後は、暖かな雰囲気が漂う会場で立食式の軽食をとりながら交流し、あっという間の1時間がおわりました。

今回は男性教職員の多数の出席があり、女性研究者の活動の一端がアピールできたこと、また様々な意見を頂戴できた好機となりました。今後も男女共同で考え行える企画を計画していきたいと思えます。



リニューアル1年

群馬大学医学部附属病院

医療人能力開発センター 男女協働キャリア支援部門

男女協働キャリア支援部門は、2010年に女性医師等・教育支援部門として群馬大学医学部附属病院医療人能力開発センター内に設置されました。男女共同参画の流れを受け、女性支援から男女協働へと、2016年4月に名称を変更しています。また、附属病院には育児等の理由で短時間勤務を可能とする女性医師支援プログラムがあり、これまで95名の方が利用していますが、こちら「医師ワークライフ支援プログラム」と名称を変え、2016年4月より、男性の利用も可能としました。

2017年度には初めて男性医師の利用予定があります。イクメン、イクボスという言葉がなじむにはまだ時間がかかるかもしれませんが、少しずつ社会も変わっています。男女問わず、多様な働き方が当然となることが求められるのではと思います。

齋藤教育学部長インタビュー ～男女共同参画を語る～

インタビュー 齋藤 周

教育学部長

インタビュアー 本多 悦子

理事（学長特命担当）

工藤 貴子

男女共同参画推進室長



教育学部は女性研究者がいるのが当たり前

工藤：教育学部における男女共同参画の現状についてお聞かせください。

齋藤：他の学部より女性の教員の比率は高く、女性研究者がいるのが当たり前の環境はできていますが、研究分野によって女性の少ないところはあります。学生は男女比ほぼ半々なのですが、専攻・教科による偏りが大きいです。偏り方については、社会のジェンダーバイアスに影響を受けているという印象をもっています。

工藤：女性の割合はいかがでしょうか。

齋藤：教授のうち13%が女性、准教授・講師では33%が女性です。助教は、そもそも学部にポストがありません。

工藤：理工学部とだいぶ違いますね。じゃあ、女性の先生方も教授会で普通に発言されているのですか。

齋藤：人数比で2割いますし、女性だから発言しにくいというのは、おそらくないだろうと思います。教授会は専任教員93人全員がメンバーなので、教授と准教授の違いはそんなに意識しないですね。

本多：情報も共有できるし、決定権も同じようにあるという形ですね。

仕事と家庭の両立を実現するのは難しい

工藤：話題を変えて先生のプライベートな男女共同参画についてお聞かせ下さい。



齋藤：社会的には、男女平等を専門で研究しているし、男女共同参画の審議会にも加わっています。それでプライベートでは仕事と家庭の両立を実現できているかというとなかなか難しいのですけれど、授業で仕事と家庭の両立の話をするときに、家庭でやったことをネタにする（笑）。

工藤：例えば？

齋藤：子どもの小さい頃のおむつ換えの経験談をしたり、夫婦別姓の話も、自分の問題として、こう考えたから婚姻届を出さないで事実婚でやっていると伝えていきます。

工藤：やっぱり説得力があるというか、それは届くのではないのでしょうか。

齋藤：でも、そんなに立派な話じゃなくて、僕は怠け者なので家事も言われないとやらないのです。でも、男女平等って理屈は分かっているから、言われるとやるのですよね。

本多：普通は言われてもやらない（笑）。

齋藤：彼女の怠け者改造作戦が上手いです。子どもがおむつ換えが必要な状況になると、彼女はちょっと遠くに行っている（笑）。

本多・工藤：ハハハ。おかしい～。

齋藤：いつの間にかおむつ換えは僕の当番になって子どもも下の世話は父親の役割って認識する。例えば、夜中におねしょすると必ず「パパ～！」って起こすのです。「ママ～！」とは呼ばない（笑）。たいへんだけれど楽しいなっているのは、子育てしてきて実感はありますね。

女性研究者が色々な場に顔を出せる環境整備を

本多：最後になりますが、将来、学部の中も含めて群馬大学の男女共同参画は、どういう方向に進んでいったら良いのでしょうか。

齋藤：やっぱり男性も女性も居て当たり前の空間が良いですね。実際に職場で女性の比率がいきなり3分の1にでもなれば、意識も否応無しに変わって行くのでしょうか。大学教員って夫婦で別居している方も結構いらっしやいますね。そのとき子どもがいると圧倒的に女性の方に負担が偏ってくる。サポートをすることによって、女性研究者が色々な場に顔を出せる状況を作っていくと、その場の中にいるのが当たり前になっていくでしょうから、やはり女性研究者のサポートが中心となり続けると思います。男女平等が現実のものとなるまでのポジティブアクションです。

本多・工藤：本日はありがとうございました。